

幼児わいせつを犯した非行少年2事例の TAT 反応についての一考察

齊 藤 文 夫

A Study of the TAT Responses Produced by Two Delinquent Juveniles Who Had Committed Indecent Assault against Children

Fumio SAITO

要 約

幼児に対し強制わいせつ行為をはたらいた非行少年2事例を取り上げ、そのTAT反応を手がかりとして、性非行の心理機制を考察した。事例Aは16歳男子、事例Bは17歳男子、いずれも中学校時代から非行が顕在化し、教護院に収容された後、本件強制わいせつ事件で少年鑑別所に収容されたものである。非行の態様は一見類似しているが、TAT反応を吟味することにより、ふたつの事例の異同が明らかとなり、性非行の「意味」についての理解が深まった。事例Aは、強い孤独感や寂寥感を抱いていたものの、異性に対する性愛的な空想は伴っていなかったと思われ、非行は幼児を相手に孤独感を紛らわせるための行為であり、生育環境や幼児期の母子関係に大きな問題があると推察された。事例Bは、性愛的な空想を伴っており、幼女を相手に自己の男らしさを確かめるとともに、男として一人前の自分を幻想しつつ、わいせつ行為を反復していたものと思われ、家庭環境や親子関係には事例Aほどの大きな問題がないと推察された。こうした事例研究を通して、TATが性非行少年の心理鑑別に有用な道具であることが示された。

キーワード：性非行、事例研究、心理査定、TAT

第1節 はじめに

本稿は、幼児に対して強制わいせつ行為を犯した非行少年2例のTAT反応を事例研究的に考察するとともに、そうした考察を通して、TATという心理査定技法が非行少年の心理鑑別において有用な道具のひとつであることを示そうとするものである。

強制わいせつ事犯少年のTAT反応を、筆者なりの着眼点にもとづいて読み解くことによって、この種の性犯罪を犯す非行少年らの心の世界についての理解を深めたい。TAT空想を検討することを通して、性非行少年らの内面の問題性や心理力動の歪みを多少とも明らかにすることができれば幸いである。

TATをどのように解釈すべきかという問題について、氏原(1980)は「具体的な解釈例に基づいて議論せぬ限り、ナンセンスに近い。しかし、……TAT解釈について公表されたものは、わが国にはそれほど多くない」と述べた上で、「資料をさらに蓄積する」ことが重要であると論じている。鈴木(1986)もまた、TAT研究における事例研究の乏しさを指摘し、TATに関する研究は「具体例に基づいた議論」であるべきだとしている。

筆者もまた、TATの解釈の研究においては、さまざまな事例を累積し、具体的な事例研究にもとづいて解釈法が探られるべきであろうと思う。その意味で、本論のごとき事例報告にも、いささかの意義があろうかと思う。

第2節 強制わいせつについて

本論に入る前に、強制わいせつの定義、強制わいせつ事犯の最近の動向、並びに犯行態様の類別や犯罪心理学的な観点からの類型について、若干述べておきたい。

刑法176条によれば、強制わいせつとは「13歳以上の男女に対し、暴行又は脅迫を以てわいせつの行為を為す」こととされ、「13歳に満たざる男女に対し、わいせつの行為を為す」ことも同罪であるとされている。強姦の場合には被害者が女性に限られているのに対し、強制わいせつの場合には、被害者は男女いずれであっても犯罪が成立し、また、被害者が13歳未満であれば、たとえ暴行や脅迫を用いなくとも強制わいせつが成立する。

わが国における強制わいせつ事犯の最近12年間の推移を公的な統計によって示すと表1のごとくである。警察の認知件数は平成2年までは2,000件台で推移していたが、平成3年以降3,000件台を超え、近年やや増加傾向にあると見られる。検察庁受理人員の統計によっても、平成元年に1,400名台に乗り、同4年には1,500名台、同6年には1,600名台を超えており、検挙されるわいせつ犯人は着実に増勢傾向にあることが示される。ただし、検察庁受理人員のうち少年の人員だけに着目すると、昭和59年には1,310名であったところ、その後漸減傾向が続き、

表1 強制わいせつ事犯の警察認知件数、検察庁受理人員、同少年人員及び少年比 — 1974 (昭和 59) 年から 1995 (平成 7) 年—

年次	警察認知件数	検察庁受理人員	左のうち少年人員	少年比
1974 (昭和 59) 年	2,369	1,497	1,310	87.5
1975 (60) 年	2,645	1,604	1,207	75.2
1976 (61) 年	2,291	1,377	1,069	77.6
1977 (62) 年	2,404	1,305	966	74.0
1978 (63) 年	2,867	1,398	960	68.7
1979 (平成元) 年	2,759	1,491	910	61.0
1980 (2) 年	2,730	1,417	743	52.4
1981 (3) 年	3,176	1,479	717	48.5
1982 (4) 年	3,505	1,566	677	43.2
1983 (5) 年	3,581	1,506	582	38.6
1984 (6) 年	3,580	1,610	656	40.7
1985 (7) 年	3,644	1,644	605	36.8

- 注) 1. 「少年」とは、「20歳未満の者」をいう。
 2. 「少年比」とは、検察庁受理人員のうち少年の割合をパーセントで示した数値である。
 3. 法務総合研究所 (1994, 1995, 1996) にもとづき、筆者が作成した。

表2 幼女に対する性犯罪における被害女児の年齢

研究者 (発表年次)	国名	被害女児の年齢	割合
Mohr, J. W. (1964)	カナダ	8-11	52%
McGeorge, J. (1964)	オーストラリア	6-8	40%
山岡 (1968)	日本	5-7	40%

注) 清水・山岡 (1974) による。

平成7年には半数以下の605名となっている。少年比を見ても、昭和59年当時は強制わいせつ犯人のうち90パーセント近くが少年であったのに対し、平成7年には40パーセント以下となっている。少年による強制わいせつ事件は明らかに減少しているのである。

強制わいせつの犯行態様については、やや古い資料ではあるが、清水・山岡 (1974) が、昭和40年当時警視庁管内で検挙された強制わいせつ被疑者200名の事件について科学警察研究所が調査した結果を紹介している。それによれば、最も多いものは被害者の衣服の上から胸や局部に触れるものであり、次いで、衣服の下にまで手を入れるものが多いという。犯行場所については路上が最も多く、電車内や映画館などでの犯行がそれに続くとしており、その他の犯行態様 (例えば、被害者の居宅に侵入してわいせつな行為に及ぶものなど) は、ごく少ないとされている。

清水・山岡 (1974) はまた、幼女を対象とした性犯罪における被害女児の年齢について、外国文献などを含めて、表2のような結果を得たとしている。これは強制わいせつに限定した被害調査ではないが、女児が性犯罪の被害者になる場合、わが国でも外国でも、10歳以下の幼児がほぼ半数くらいを占めることがうかがわれる。女児を対象として性犯罪に及ぶ犯人の場合、相手が身体的に未成熟であることにはほとんど顧慮していないことがうかがわれる。この種の性犯罪者は、たとえ身体的に成熟していなくとも、甘言によって容易に操作され、抵抗する力もなく、し

表3 少年の性非行の類型

研究者	類型	説明
大川 (1975)	快楽追求型	遊びの要素が強い。性的な問題よりは生活態度や環境の問題が大きい。
	短絡型	ある程度の計画性を持ち、被害者の居宅に侵入するなどして性犯罪に及ぶタイプ。性的未熟さとともに犯罪性の問題もある。
	衝動型	通りがかりなどに衝動的に犯行に及ぶもの。性格上の問題（劣等感、内閉性）、性的不完全感、葛藤などが認められる。犯罪性の問題は、大きくはない。
	付随型	性的な意図はもっていなかったが、犯行場面で付随的に性犯罪を行ったもの。犯罪性の問題が大きい。
堀内 (1991)	攻撃型	女性に対する攻撃的な衝動によるもの。
	遊び型	性行為が遊びの延長としてなされるもの。
	利欲型	売春など、金銭的な利益を求めるもの。
	倒錯型	小児愛、フェティシズム、窺視症（のぞき）、露出症、サディズムなど、倒錯的なもの。

かも性行為の意味をじゅうぶんに理解できない女兒に目をつけるのである。

性犯罪を犯す非行少年らを犯罪臨床の実務的な観点から類型化しようとする試みがいくつかある。例えば、見神（1968）は、少年の性非行を単独型と集団型に二分した上で、単独型には衝動的なものや性格変倚の強いものが含まれ、集団型には遊び型が多いとしている。また、山根（1968）は、(1) 快楽追求・消費型、(2) 低人格・短絡型、(3) 強迫神経症型、(4) 精神病質・破壊型、の4類型を唱え、高桑ら（1971）は、(1) 情緒発育未熟型、(2) 攻撃的情動変調型、(3) 神経症型、の3類型を主張している（以上の記述は、大川（1975）を参照した。）。

こうした先行的な研究を踏まえ、大川（1975）は、少年の性非行の類型としては、(1) 快楽追求型、(2) 短絡型、(3) 衝動型、(4) 付随型、という4類型が適当であろうとしている。最近において、堀内（1991）は、(1) 攻撃型、(2) 遊び型、(3) 利欲型、(4) 倒錯型、といった類型を唱えている。大川と堀内の類型を簡潔に図表化すると表3のごとくである。

第3節 目的及び方法

冒頭で述べたように、本稿の目的は、TAT 反応を通して、強制わいせつ行為を犯した非行少年らの内面の心理力動や人格上の問題点を事例研究的に考察することにある。そうした事例研究を通して、TAT 解釈の進め方を検討するとともに、TAT が性非行少年らの心理鑑別のための有用な道具となりうることを示したい。

TAT 反応の分析・解釈にあたっては、ロールシャッハ・テストにおける片口法やエクスナー法のような一定の方式が確立していない。ここでは、筆者が性非行事例の TAT 反応を読み込む際に有用であると思う着眼点を掲げ、それらに基づいて、事例ごとに TAT 反応を吟味する。そうすることによって、筆者の着眼点が少年鑑別の臨床場面である程度有用であることを示したい。事例研究ではあるが、いくつかの着眼点に基づいて TAT の具体的な事例を読み解いていくことで、性非行少年らに特徴的と思われる人格上の問題点や心理力動の歪みをあぶり出すことができれば幸いである。

表4 ふたつの強制わいせつ事例の要点の比較

項目	事例 A	事例 B
性別・年齢	男子・16歳	男子・17歳
家族構成	実父母, 実姉・実弟各1人	実父母, 実妹2人
施設歴	児童相談所, 教護院	児童相談所, 教護院
精神障害	軽度の精神薄弱	認めない
鑑別所入所回数	初入	初入
本件被害児	小学校低学年の男女児	10歳の女兒など
本件の犯行場所	公園, 又は自宅内	自宅アパート内

紙幅の制約もあるので、本稿ではふたつの強制わいせつ事例を取り上げる。いずれも、少年鑑別所に収容され、鑑別を受けた事例である。ふたつの事例の要点をまとめると、表4のごとくである。この2事例は、一見すると、かなり類似しているように見える。これら2事例の異同を、TAT反応を通して吟味したい。

使用図版は、マァレー版TATである。使用した図版や枚数には、事例ごとに多少の異同がある。施行方法は、いずれも少年鑑別所において、個別法で施行された。

なお、TATを解釈する際の着眼点として、本稿では、(1)バイオリンへの取組み、(2)自己像、(3)父親像・男性像、(4)母親像・女性像、(5)家族像、(6)性愛的な主題・異性関係、(7)罪悪感、(8)その他の特徴、の8点を取り上げることとする。

第4節 ふたつの事例の考察

事例 A 16歳男子

1) 事例の概要

(1) 本件非行：虞犯（事犯の内容は強制わいせつであるが、虞犯として立件された。）

無為徒食の生活を送っていたところ、その間、近隣の小学校低学年の幼児（男女）を言葉巧みに誘い、公園又は自宅において、男児の陰茎を口淫し、あるいは女児の陰部を手指で触るなどの行為を反復していた。本人によれば、射精は伴わなかったと言う。

(2) 家族歴：実父母、実姉・実弟各1人。父は建築関係の職人。面接所見や書信から見て、父母ともに、やや知的に劣っていることがうかがわれる。

(3) 生育歴：母が入院したため、2歳から1年6月間くらい親戚方に預けられる。そのため、親戚方になつき、母が迎えに来たとき、家へ帰るのをいやがったという。小学校時代から、いじめられっ子で登校渋りがあり、パンや菓子の万引、教室のストーブで紙を燃やすといった火遊びもあった。このころ、両親は借金に追われており、家ではろくに食事も与えられなかったらしい。中学入学後も、いじめられっ子で、先輩の命令で万引させられたり、単独でも万引をしていた。中学1年時、近所の幼児を言葉巧みに公園などに誘い出し、男児の性器を触る・しゃぶる、女児の性器に自分の性器をこすりつけるなどした。それが発覚し、中学

2年時、児童相談所を経て、教護院に収容される。中学校卒業後、家に帰り父の家業を手伝っていたが、徒遊がちであった。

(4) 知能：IQ = 60

(5) 精神障害：軽度精神薄弱と判定される。

(6) 参考事項：性経験，薬物乱用なし。

2) TAT 反応のプロット

- 1 バイオリンが弾けなくて悩んでいる。将来は天才のバイオリニストになりたい。
- 2 人に何か話したような顔をしている。淋しそうな顔して、3人とも考えている。暗い感じでこの世の終わりだっている顔。早くこういう淋しい気持ちがなくならないかな。3人は他人どうしだと思ふ。
- 3 BM だれかとけんかして、相手を叩いてしまった。謝りたいけど、謝れなくて、どうしていいのかわからない。ひとりで泣いている。
- 6 BM けんかをした後で、ふたりともむすっとしている。男の人は謝りたいけど、「わしは悪くないのに」という気持ちもある。女の人は本当は男の人を好きだけど、けんかの後なので、謝りづらい。ふたりは夫婦で、結局男性が謝って解決する。
- 7 BM 電気を暗くした部屋で、ふたりで、悪いことをしようと秘密の相談をしている。
- 8 BM 前の人変な顔をしてるけど、後ろの先生方は必死に手術している。手術は成功する。
- 10 結婚の約束をしているふたりが秘密に会っている。両親はふたりの結婚に反対するけど、……結局は結婚を了解する。
- 11 石がごろごろしていて、滝の上には龍がいる。下の方はそれを恐れているが、結局人間は龍に食べられてしまう。
- 13 B 家の中が真っ暗で、だれかを待っているけど、だれも来なくて、ひとり淋しく座っている。待ちくたびれて死んでしまう。
- 13 MF 男性が、好きな女の人を絞め殺してしまった。自分は死ねなくて、ひとりで泣いている。逃げてしまうけど、最後は警察に捕まる。(Q. 絞め殺したというのは?) 女の人が他の男と寝てしまったが、それを隠していたので。
- 19 子どもに夢を与えてくれそうな家だけど、その中には人喰い女がいて、早く子どもが近づいてこないかなと待っている。でも、子どもが来ないので、がっかりして死んでしまう。
- 20 真っ暗な空の下で、ひとりの男性がだれとクリスマスを祝ったらいいのかと、うつむいて考えている。だれか相手を捜している。……最後には相手が見つかって楽しくクリスマスを祝う。

3) TAT 反応の特徴

(1) バイオリンへの取組み

「バイオリンが弾けなくて悩んでいる」という空想であり、無能力感、自信欠如感が示唆される。また、「将来は天才バイオリニストになる」と述べていることから、劣等感の補償として、万能な自分を幻想しつつ非現実的な空想世界に逃避しやすい傾向がうかがわれる。

(2) 自己像

「人と話したそうな、淋しい顔をしている」(2 図)、「けんかをして、謝りたいけど、どうしていいのかわからず、ひとりで泣いている」(3 BM 図)、「真っ暗な家の中で人を待っているが、待ちくたびれて、淋しく死んでいく」(13 B 図)、「ひとりで泣いている」(13 MF 図)、「真っ暗な空の下で、クリスマスを一っしょに祝ってくれる相手を探している」(20 図)という空想が手がかりとなろう。事例 A の対人関係の拙劣さがうかがわれるとともに、だれからも相手にされない孤立感や寂寥感がはっきりと示されている。

なお付言すれば、2 図における3人を関係づけることができなかったこと、8 BM 図における「変な顔をしている前の人」と「後ろで必死に手術している先生たち」とを関係づけることができなかったことも、A 少年の対人関係能力の拙劣さを示唆している。

(3) 父親像・男性像

12 の空想物語において「お父さん」や「息子」ということばが全く語られなかった。父親イメージは希薄であろうと推察される。強いて挙げれば、7 BM 図の「悪いことの秘密の相談をしている男性」や、13 MF 図の「女の人を殺して、逃げ出すが、結局は警察に捕まる男性」が、父親や男性のイメージを反映しているかもしれない。そうであるとすれば、A 少年の抱く父親像や男性像はかなり悪い。A 少年は、そうした父親とある程度同一視し、そうした父親の考え方や行動様式を取り入れているのであろうか。

(4) 母親像・女性像

19 図における「家には人喰い女が住み、子どもが来るのを待っている」、11 図における「龍が人間を食べてしまう」という空想が注目される。食いつくし、破壊する攻撃的な母親(女性)像が示唆される。おそらくは本人は自覚していないだろうが、母親に対する強い恐怖感が暗示される。きわめて特異な母親イメージであるといつてよい。

その他、「ほかの男と寝たので、男性から殺害される女性」(13 MF 図)というのも、A 少年の抱く母親・女性イメージと関連しているであろうか。

(5) 家族像

2 図における3人を「他人どうしである」とし、「(3人とも)この世の終わりという暗い、淋しい顔をしている」と語る。10 図では「子どもの結婚に反対する両親」が語られる。3 BM 図と6 BM 図では登場人物がけんかをしており、13 MF 図では殺人事件さえ起こる。最後の20 図では「クリスマスを共に祝う相手が見つからない」と述べている。

また、7 BM 図は「電気を消した暗い部屋」であり、13 B 図は「真っ暗な家」であるとしている。19 図では「人喰い女の住む家」という特異な思いつきを語る。

こうした反応から、A少年の家族のまとまりの悪さや家族内の葛藤が示唆され、暗い家庭の様子が想像される。

(6) 性愛的な主題・異性関係

「結婚の約束をしているふたりが密会している」(10 図) という空想が語られるが、紋切り型の結末でけりをつけた貧弱な物語である。一方、「男性が女性を絞め殺して、逃げてしまう」(13 MF 図) という空想がある。異性との性愛的な関係を思わせる空想が乏しく、異性関係の稚拙さがうかがわれる。女性に対する敵意や攻撃性も暗示されている。

(7) 罪悪感

「けんかの後、謝りたいけれど、どうしていいか分からない」(3 BM 図) という人物や、「けんかの後、謝りづらい」(6 BM 図) といった人物が登場する。また、「女性を殺害した犯人が自殺もできず、警察に捕まる」(13 MF 図) という物語もある。これらはいずれも、A少年の超自我に関係する空想である。これらの空想から推察すれば、A少年は、本件非行についてある程度の罪悪感を抱いており、謝罪しなければならない、贖罪しなければならないということは分かっているのだろう。

(8) その他の特徴

紙幅の制約もあるので、詳しい検討は省略する。

4) TAT から推測される本件の心理機制

この事例は、少年鑑別所において、軽度の精神薄弱と判定されたものである。知的な能力が劣ることから、社会的な判断力や行動統制力が乏しく、そのことが本件非行の要因のひとつであることは否定できない。しかし、TAT 反応を読み解くことによって、本件非行の心理機制をさらに深く理解することができると思われる。

上述の(3)、(4)、(5)を重ね合わせれば、A少年の父親イメージははっきりとせず、母親イメージはかなり悪い。さらに、家族関係にも大きな問題があることがうかがわれる。7 BM 図の「電気を暗くした部屋」や13 B 図の「家の中が真っ暗である」といった着想、あるいは「人喰い女の住む家」(19 図) といった空想が、それを象徴的に示している。A少年は、こうした空想を語ることによって、自分の家が「電気が消えたような、真っ暗な家」であり、人喰い女の住む恐ろしい家であることを伝えようとしているのだろう。(ただし、見方を変えれば、図版の暗さへの言及は抑うつ気分の反映でもあろうし、食人空想は、口唇期にまで遡る強い愛情飢餓や原始的な破壊性をも暗示するものともいえよう。)

いずれにせよ、A少年の家庭は大きな問題を抱えており、A少年は母親のいわば「食いもの」にされ、家庭内での生存さえ脅かされていたのではないかとということが想像される。この少年の幼児期における過酷な母子関係が強く示唆される。

自己像に関しては、「悩んでいる」(1 図)、「淋しい気持ち」(2 図)、「ひとりで泣いている」(3 BM 図)、「ひとりで泣いている。死ぬこともできず、逃げ出す」(13 MF 図) といった空想

が繰り返されている。特に、13B図における「真っ暗な家で、だれかを待っている。淋しい。待ちくたびれて死んでしまう」という孤独な少年の物語と、20図における「真っ暗な空の下、クリスマスをいっしょに祝ってくれる相手を捜している」という孤独な男の物語に注目したい。これらの図版では、登場人物とA少年自身との間に強い同一視が生じているようだ。これらの反応を重ね合わせれば、だれにも相手にされず、孤独な淋しい世界に住んでいるA少年の心の世界があぶり出されてくるようだ。

以上の諸点から、本件非行の機制としては、家庭でも愛情的に満たされず、社会でもだれにも相手にされない孤独なA少年が、幼児を相手にすることで淋しさをまぎらわせていたのであろうと考えられる。

性に対する漠然とした興味関心があったことは否定できない。しかし、上記(6)でも触れたように、異性との性愛的な結びつきに関する幻想は、おそらく伴っていなかったであろう。そのように推測できる理由としては、3BM図や6BM図におけるトラブルの原因が「けんか」であること、13MF図で性的な連想がほとんど動いていないことがあげられよう。本件の態様を見ると、女兒だけでなく、男児も被害にあっている。A少年は被害児童の性別にはそれほど頓着していなかったのである。そのことから、A少年のわいせつ行為には、さほど性愛的な幻想が伴っていなかったことが考えられる。

以上を要するに、劣等感や無能力感を抱くA少年が、性的な欲望や幻想からではなく、むしろ寂寥感や孤独感や愛情欲求不満をまぎらわせようとして本件に及んだことが推察される。本件の被害児童は、卑小感を抱くA少年のいわば分身であり、A少年は自分と被害児童とを重ね合わせていた。そして、幼児の性器を弄ぶことによって、少年は自分自身を慰めていたといえるのではないだろうか。そうした観点からいえば、本件非行は、孤独な少年のいわば自慰行為の代償でもあったのだろう。

なお、上記(7)で触れたように、A少年の内面には、ある程度の規範意識は育ってきていると見られる。いったん家庭から切り離され、教護院で生活指導を受けたことの効果でもあろう。しかし、今回の性犯罪をけんかや殺人と同じようなものとして認識しているようでもあり、「自分は(それほど)悪くない」(6BM図)という気持ちもあるようだ。性愛的な幻想を持つほどに成長していないA少年は、性犯罪とけんかや殺人の区別もできないのではないだろうか。おそらく、A少年には、幼児へのわいせつ行為が社会的にはきわめて強く非難される重大な性犯罪であるという認識はなかったであろう。

事例B 17歳男子

1) 事例の概要

(1) 本件非行：強制わいせつ

女兒(当年10歳)を言葉巧みに自宅アパートに誘い込み、同女の背後から胸を触ったり、

パンツ内に手を入れて陰部を弄んだ。なお、本人はそうした行為をしながら自慰を行い、畳に射精したと言う。被害児は、職場の先輩の子どもの遊び友達で、かねてから知り合っていた。本件当日、被害児に対し「ファミコン遊びをしよう」と申し向けて、自宅に誘い込んだと言う。

- (2) 家族歴：実父母と実妹2人。父は数人を雇い、建築関係の工務店を自営している。
- (3) 生育歴：著患なく生育。小学校高学年になったころ、家出、万引、バイク盗を働き、警察に補導される。中学校へ進むが勉強が面白くなく、家出を4、5回繰り返す。中学3年時、児童相談所の一時保護を経て、教護院収容。そこで中学校を卒業する。その後、遠隔地に住む父親の遠縁を頼り、建築関係の見習い工をしていた。その職場で知り合った先輩の子どもたちと遊ぶうち、そうした子どもたちを相手に数回のわいせつ行為に及んでいたものである。
- (4) 知能：IQ=81
- (5) 精神障害：認めない。
- (6) 参考事項：性経験、薬物乱用はない。

2) TAT 反応のプロット

- 1 「舞台」という題です。僕はバイオリンを弾こうと思って、お母さんにねだってクラブへ入った。でも、半年たっても、いくらやっても弾けない。悩み込んでいる僕の姿である。ベートーベンみたいな有名人になって、舞台へ出たい。目が見えなくても、努力すれば、僕でもできるかもしれないと考え込んでいる。
- 2 男の人は畑仕事に熱中している。女の人は家へ帰って本を読もうと思っている。木にもたれているおばさんは、妊娠しているから、ただ眺めているだけ。おばさんは、やさしいところもあるけど、怖いところもある感じで、うちのお母さんみたい。中身はやさしいけど、外見は怖そう。うちのお母さんもそうかな。
- 4 ふたりは恋人同士。ふたりはけんかをして、男は帰ろうとしているが、女はとめようとしている。男はその時「おれと結婚してくれないか!」と一気に告白する。女は「いいです」と許してくれて、ふたりはいつまでも、いつまでも幸せに暮らす。
- 5 女の人が寝ていると、炊事場の方から物音が聞こえてきたので、だんなを起こす。だんなは棒を持って、炊事場へ行く。それから1時間たって見に行くと、だんなが息子を叱っていた。息子が夜遅く帰ってきて、お腹が減ったので、冷蔵庫をぐそぐそしていたのだ。お母さんは何か作って、息子にやった。お父さんは何も言わず、ベッドに戻った。
- 6 BM 女の人はこの家の女主人で、男は召使いか運転手。女主人の息子が感染する悪い病気のために入院中なので、奥様は「私は病気がうつっても息子のそばにいたい」と言うが、男は「だめです。今は何をしてもむだです」と言う。息子はずっと入院し続け、医者は「あと3年の命です」と言う。奥様はショックで1ヶ月寝込むが、息子が自分の宝だと思って、病院へ入っていく。息子は死に、奥様もその1年後に死ぬ。後には幽霊屋敷み

たいになった家だけが残る。

- 7 BM おじいさんは探偵で、若い方は警察官で、ふたりで宝石どろぼうを捕まえる相談をしている。「宝石どろぼうを捕まえよう」という題。……あと、別の話で、お兄さんと弟が、死んだお母さんのお墓を作ろうとしているが、お金がないので、どうしようかと相談している。ふたりは、お父さんがちがいます。お母さんが結婚してお兄さんが生まれたけれど、お母さんはまた結婚して弟が生まれて、それからお母さんはすぐに死んだ。それから、お兄さんは弟の面倒を見ていた。
- 8 BM これは拳銃ですか。戦争か、やくざの喧嘩か、西部劇。拳銃を持っているのが、リーダーです。今、ひとりが撃たれて、ひげをはやしたお医者さんがお腹の中の弾をとろうと手術している。その仲間が明かりを照らしている。この後も、もめごとが続いて、死者が15人くらい、負傷者が30人くらい出て、45人くらいが死んだり、怪我をする。それから、悪いやつらは、どこかへ行ってしまう。
- 10 この男の人はお金を稼ぎによその町へ行こうとして、女の人とお別れに抱き合っている。お金を貯めて戻ってくるけれど、いい暮らしにはならない。でも、男の人が技術を身につけたので、ふたりは普通の生活はやっていけるようになる。
- 11 「地獄山」という題。旅人が4人、馬が2頭。旅人は、武器として鉄砲と弓矢と刀を持って、地獄山へ入り、旅は長く続く。男たちの目標は「龍の涙」だった。みんなが橋を渡っていると、恐竜のような怪物が出てきた。みんなは小さな穴に逃げ込むが「ここで死んではたまらない」と思い、勇気ある若者が、穴に首を突っ込んできた恐竜の首を落とす。恐竜の肉を龍の餌にするために切り取る。勇気を出してさらに何キロも旅を続けると、大きな洞穴があった。そこに餌の肉を置き、龍の来るのを待った。何日かが過ぎ、湖の中から龍が出てきて肉を食べようとした。4人は鉄砲や弓矢や刀で龍と戦うが、次々と死んでいった。残ったひとりはお恵を使って、大きな石の下に火薬を仕掛けて、龍がその下に来たところで、火薬を爆発させた。龍は下敷きになって死んだ。龍のまぶたの中から涙を無理矢理取り出して、自分の住んでいる村に帰った。3人の死体は馬の背中に乗せて帰った。村へ帰って、3人を埋めた。龍の涙は命の水ともいわれ、死にそうになった人でもそれを飲むと生き返るし、それを持っていると病気にもならず、悪魔も来ない。それは勇者の印だから。
- 13 MF 男の人と女の人がドライブに行き、夜になってご飯を食べて、一晩を過ごした。男の人は、机の上に電話番号とメッセージを書き置いて出ていく。そのうち、お父さんとお母さんも結婚を許してくれて、ふたりは結婚して、幸せに過ごす。
- 19 これは家で、窓から明かりが見えて、煙突がある。周りは大雪。家の中では、クリスマスをしている。家族は4人。お父さん、お母さん、息子、おばあさん。僕は「クリスマスだというのに、外へも行けない。ここから離れよう」と言うが、お父さん、お母さん

は「ここは、春や夏になれば、いい所だ。冬の間だけがまんしろ」と言う。息子は「大人になったら、この家を出て行こう」と、心の中で思っている。

3) TAT 反応の特徴

(1) バイオリンへの取組み

「お母さんにねだって、クラブへ入った」ものの、「いくらやっても弾けない。弾き方が下手で悩んでいる」という空想である。「ベートーベンみたいに有名になって、舞台へ出たい」とも語っている。無能力感や自信欠如感もうかがえる反面、みんなの注目を集めたい、認められたいという自己顕示や承認の欲求も強いようだ。

先の事例 A の空想では、1 図の少年はひとりで悩んでいた。しかし、この事例 B の空想物語に登場する少年は「お母さんにねだって、クラブへ入る」とされている。こうした空想を思いついたということは、B 少年の場合、子どものころからある程度は母親との安定した結びつきがあったからであろう。

また、「目が見えなくても……」と語られていることから、B 少年は、図版の少年が盲目であると空想していることがわかる。

(2) 自己像

「バイオリンが弾けない、目が見えない僕」(1 図)、「夜遅く帰り、お父さんに叱られる息子」(5 図)、「悪い病気で入院して死ぬ息子」(6 BM 図)という空想から、不全感を抱き、自信欠如的で、家庭でも厄介者扱いされている B 少年の姿が連想される。「腹が減って冷蔵庫をごそごそ探している息子」(5 図)という空想からは、愛情欲求を満たされないでいることが連想される。

その一方で、「奥様にとって、息子は宝である」(6 BM 図)という部分や、「龍を倒し、龍の涙という勇者の印を手に入れる若者」(11 図)という空想物語は、自己中心的・空想的な万能感を伴って肥大した自己像を暗示する。

「金を稼ぐために、女と別れてよその町へ行き、技術を身につける男性」(10 図)や、「大人になったら、この家を出たいと考えている息子」(19 図)という空想からは、男としての自立を志向する内面の動きがうかがわれる。

(3) 父親像・男性像

「息子を叱るお父さん」(5 図)や、「がまんしろ、と息子に言うお父さん」(20 図)が登場する。こうした父・息子の関わりも、事例 A では全く見られなかったものである。B 少年の場合、ある程度は父親との結びつきもあり、それなりの父親像も内面化されているのだろう。

6 BM 図において、「奥様」が「女主人」であるのに対し、男性は「召使いか、運転手」であるとされている。B 少年の場合、父親や男性は、一家のあるじというよりも、働き手としてしか見られていないのであろうか。

2 図の男性は「畑仕事に熱中している」とされ、10 図の男性は「お金を稼ぎ、技術を身につ

ける」とされる。そのほかの図版で登場する男性も「召使いか、運転手」(6 BM 図)、「探偵と警察官」(7 BM 図)であるとされ、いずれも職業についての言及がある。こうした言及も事例 A では全く見られなかったものである。B 少年は、A 少年に比べると社会性が発達していることを示している。B 少年は、男性とは仕事や技術を持ち、お金を稼ぐ存在であると考えているようである。

(4) 母親像・女性像

「お母さんに、ねだる」(1 図)、「やさしいところもあるけど、怖いところもあるおばさん」(2 図)、「腹をすかせた息子に食べ物を作ってやるお母さん」(5 図)、「奥様は病気の息子を看病する。奥様は息子を自分の宝だと思っている」(6 BM 図)といった空想が手がかりになる。事例 A における「人喰い女」に比べれば、事例 B の抱く母親像はかなり肯定的であるといえようし、母・息子の結びつきも認められる。

「息子の死後、奥様も死ぬ」(6 BM 図)や「死んだお母さんの墓を造る」(7 BM 図)といった空想が語られている。これらの反応は、いずれも母親の死と結びついた空想であり、ここから母親への潜在的な敵意が推測できるかもしれないが、ここでは、むしろ母・息子の共生的な依存関係を暗示するようだ。母親の墓を造るという空想は、母親とのそうした関係を断ち切り、母親から自立しようとする内面の動きを示唆するのかもしれない。

(5) 家族像

19 図では「家の中で、家族でクリスマスをしている」という空想が語られており、「冬の間はがまんしろ」と息子を説得する両親も登場している。家族としてのまとまりもある程度は保たれていることが示唆されている。ただし、家の外は大雪であり、春はまだ当分は来ないようではあるが。

6 BM 図においては「女主人である奥様が死んだ後、家は幽霊屋敷になる」という空想が語られており、母親が支配的な家庭が想像される。また、19 図で語られる家族は4人家族で、その構成は、父母と息子とおばあさんである。実際の家族には妹がふたりいるが、妹は空想の家族においては排除されている。また、7 BM 図の兄弟は、父親ちがいでであるとされている。

(6) 性愛的な主題・異性関係

4 図では「おれと結婚してくれ!」と告白する男性が登場し、女性もそれを受け入れ、「ふたりは、いつまでも、いつまでも幸せに暮らす」という。10 図でも「技術を身につけた男は、女とふつうの生活をやっていく」という。また、13 MF 図では、男女がドライブに行ったり、食事をしたり、一夜を共に過ごした上で、最後には「結婚して幸せに暮らす」という。この空想物語において、男が女に対して「電話番号とメッセージを置いていく」という思いつきには、女性との結びつきを求める B 少年の強い気持ちがこめられているようだ。

こうした異性との恋愛や結婚や幸福な生活に関する空想は、先の事例 A ではほとんど見られなかったものである。

また、2図における右側の女性の腹部のふくらみに気づき、「おばさんが妊娠している」と言及している。事例Bは、恋愛や結婚だけでなく、妊娠といったことをも着想できるほどに性意識が発達していることが示される。

(7) 罪悪感

7 BM 図で探偵と警察官が登場し、宝石どろぼうを捕まえる話が着想されるが、いつの間にか、母親の墓造りの話になっている。8 BM 図では「戦争か、やくざのけんかか、西部劇」の話が語られ、45人くらいが死傷するが、「悪いやつらは、どこかへ行ってしまおう」として、話にけりをつけている。B少年は、自分の犯罪を直視するほどの強さがなく、贖罪意識や自責感が乏しいことが暗示される。

(8) その他の特徴

3つの物語に題名をつけている(1図の「舞台」、7 BM 図の「宝石どろぼうを捕まえよう」、11図の「地獄山」)。これらは、不安の高さを示唆する反応であろう。題名をつけるということは「枠をはめる」ということであり、空想物語をその枠の中に収めておこうとする心の動きを示す。さまざまな図版を見ながら空想を語ることに伴って、B少年の内面では、不安を高めるようないろいろな連想が生じたのであろう。そうした不安を押し込めるために、題名という枠をはめたのではないだろうか。

また、具体的な数字をあげて空想物語の細部を叙述している。筆者が「細部の彫琢」あるいは「細部へのこだわり」とよんでいる反応である。そうした細部へのこだわりを列挙すれば、「半年たっても」(1図)、「1ヶ月寝込む。あと3年の命。1年後に死ぬ」(6 BM 図)、「死者が15人、負傷者が30人」(8 BM 図)、「旅人が4人、馬が2頭」(11図)、といった箇所である。この種の反応も、不安の高さを示すものである。ふつうの人であれば「いつまでたっても」あるいは「たくさんの死傷者が出た」などと言ってすませてしまうところで、B少年は「半年たっても」あるいは「死者15人、負傷者30人」などと、特定の数字を挙げて限定しないと落ち着かないのである。いちいち具体的な数字をあげ、それによって物語の細部を一見精緻なものにしようとすることは、強迫的な不安の強さを示すものであろう。

4) TAT から推測される本件の心理機制

まず注目すべきは、「金を稼ぐために、女と別れてよその町へ行く男性」(10図)、「大人になったら、この家を出たいと考えている息子」(19図)、といった空想である。これらの空想は、B少年が男性として自立ないし男性性の獲得という課題に直面していることを示唆する。ちなみに、7 BM 図のふたりの男性は、弟とその面倒を見る兄であると想像されている。ここにおいても、B少年が、同一視の対象としての年長の男性を求めていることが暗示される。

「龍と戦い、勝利を収めた若者は、龍の涙という勇者の印を手に入れる」(11図)、「宝石をどろぼうする」(7 BM 図)といった空想も手がかりになる。これらふたつの空想には関係がないかもしれない。しかし、筆者はここで「龍の涙」や「宝石」とは、「男としての力」、「男らしい

強さ」という貴重な宝物を意味しているのではないだろうかと思う。そのように考えることが許されれば、男としての自立を模索するB少年は、10歳の女兒を相手に、自分の「男らしさ」や「男としての力」を試していたのではないだろうかとも推察される。

前述の(6)で言及したように、B少年は、女性と恋愛もしてみたい、一夜を共に過ごしてみたいといった性愛的な願望を抱いていただろう。13MF図における「電話番号やメッセージ」が示唆するように、異性とのつながりを強く求めてもいただろう。さらには恋愛や結婚といったことも漠然と夢想していたにちがいない。しかし、現実にそれ相応の女性を相手にすることは、「バイオリンが弾けない僕、目が見えない僕」(1図)に象徴されるような自信欠如的な一面を持つB少年にとってはあまりにも不安が大きかったのであろう。

そうしたジレンマの妥協として、拒否されるおそれがなく、しかも自分でも容易に手なずけることができる女兒を相手に「一人前の男としての自分」や異性との性愛的な結合を幻想しつつ、いわば「男としての自分」を確認する儀式として強迫的にわいせつ行為を反復していたのではないだろうか。

ここで付言すれば、「目が見えない僕」(1図)や「悪い病気にかかった息子」(6BM図)といった着想からは、B少年が自分の男性としての身体に劣等感を抱き、年齢相応の異性との関わりを恐れていたことも推測される。1図における少年が「目が見えない」という空想と、11図における若者が「龍のまぶたをえぐって、勇者の印を獲得する」という空想は、おそらく無関係ではないだろう。B少年の空想のレベルでは、「目が見えない僕」は「龍の目をえぐり取る」ことで、勇者(=一人前の男性)に変身するのだろう。そのように考えれば、幼女に対するわいせつ行為は、勇者(=一人前の男性)である自分を幻想するための、象徴的な意味のこめられた行為でもあったのではないだろうか。

第5節 ま と め

前節では、ふたつの事例のそれぞれについて、TAT空想を筆者なりに吟味し、本件非行に関連すると思われる内面の心理機制を考察した。こうした考察は、筆者の自由連想のごときものであり、客観的な裏付けを欠いているとの批判もあろうが、筆者としては、TAT空想を手がかりとすることで、非行少年の心の内界に対する理解が深められたと思っている。

あらためていうまでもなく、少年鑑別所でなされる鑑別は、家庭裁判所における審判に資するためのものであり、鑑別結果通知書は、裁判官あての文書である。したがって、非行少年の鑑別は、TATの結果のみを材料にしてなされるべきではないし、いわゆる心理力動の分析も、各種の心理検査の所見、並びに面接所見やその他の関連資料にもじゅうぶんに目配りした上でなされるべきである。しかし、TATという検査技法も、非行少年の心理を理解しようとする際に、ひとつの有用な道具となりうることを、この事例研究を通して、理解していただければ幸いである。

最後に、ふたつの事例のTAT反応の異同をいくつかの着眼点にそってまとめると、以下のようになる。一見類似した強制わいせつ事犯であっても、そのTAT反応には相当なちがいがあり、そうした差異が、非行の「意味」を探る上でも役に立つことを、このまとめから理解していただければ幸いである。

(1) バイオリンへの取組み

事例A：弾けなくて悩んでいる。将来、天才バイオリニストになりたい。(家族への言及なし)

事例B：弾けない。目が見えない僕。でも、ベートーベンみたいな有名人になって舞台へ出たい。お母さんにねだって、クラブへ入って、演奏を習う。

両者はいずれも、無能力感や、それを空想レベルで補償するために万能な自己像を幻想していることを示唆する。事例Aでは、家族との結びつきが弱く、事例Bでは、家族(母親)との結びつきはあるものの、身体的な劣等感が強く、精神分析でいう去勢不安を抱いているらしいことが示唆される。

なお、バイオリンが弾けないという空想は、象徴的には、異性との性愛的な触れ合いがうまくできないということを示唆していると解釈できるかもしれない。

(2) 自己像

事例A：「息子」ということばが出てこない。

2 図：人と話したそうな、淋しい顔。

3 BM 図：ひとりで泣いている。

13 B 図：だれも来ない。人を待ちくたびれて、淋しく死ぬ。

13 MF 図：ひとりで泣いている。

20 図：クリスマスを祝ってくれる相手を探している。

事例B：1 図：目が見えない僕。お母さんにねだる僕。

5 図：夜遅く帰り、お父さんに叱られる息子。

腹が減って冷蔵庫をごそごそ探している息子。

6 BM 図：悪い病気で入院して死ぬ息子。母親も後を追って死ぬ。

母親にとって、宝である息子。

7 BM 図：母親の墓を作ろうとする兄弟。

10 図：技術を身につけ、女性と暮らしていく男。

11 図：龍を倒し、龍の涙という勇者の印を手に入れる若者。

19 図：大人になったら、家族の住む家を出ようとする息子。

事例Aでは、「息子」ということばが出ておらず、家族との結びつきの弱く、きわめて孤独な

自己像が語られている。事例Bでは、「息子」ということばがしばしば用いられ、かれが家族の中で息子としての居場所を持っていることが示唆される。また、愛情欲求不満を抱きつつも、母親に依存しており、それと同時に、男性として自立したい・一人前の男になりたいという心の動きも見られる。

(3) 父親像

事例A：「お父さん」ということばが全く語られない。
事例B：5図：息子を叱るお父さん。
20図：「冬の間は、がまんしろ」と息子に言うお父さん。

事例Aでは、父親像が希薄であるが、事例Bでは、父・息子関係が語られている。

(4) 男性像

事例A：2図の男性：特に言及なし。
6 BM 図の男性：けんかをして、むすっとしている。
7 BM 図のふたりの男性：悪いことの秘密の相談をしている。
10 図の男性：結婚の約束をした女性と密会している。
13 MF 図の男性：女を絞め殺して、逃亡して警察に捕まる。
事例B：2図の男性：畑仕事に熱中している。
4 図の男性：「おれと結婚してくれ」と、女に告白する。
6 BM 図の男性：召使いか、運転手。
7 BM 図のふたりの男性：探偵と警官。あるいは異父兄弟。
10 図の男性：お金を稼ぐために、技術を身につける。
13 MF 図の男性：女性とドライブし、食事し、一夜を共に過ごす。

事例Bの方が、はるかに成熟した男性像をもっていることが分かる。事例Aでは、男性の登場人物の職業についての言及が全くなく、異性との人間関係についても貧弱な空想しか語ることができない。事例Bでは、さまざまな男性的職業についての連想があり、7 BM 図における「弟とその面倒を見る兄」という空想に示されるように、同一視の対象としての年長の男性を希求していることがうかがわれる。

(5) 母親像

事例A：「母親」ということばが全くない。
19 図：人喰い女。
事例B：1 図：お母さんに、ねだる。
2 図：木にもたれて、ながめているお婆さん。

- 5 図：腹が減った息子に食べ物を作ってやる母親。
6 BM 図：病気の息子を看病し、息子の後を追って死ぬ母親。
19 図：息子に「がまんしろ」と言うお母さん。

事例 A の「人喰い女」という連想は、かなり特異であり、恐ろしい母親像と示唆しているようだ。事例 B では、かなり暖かい母親像が語られている。

(6) 女性像

省略。

(7) 家族像

- 事例 A：2 図：3 人は他人どうし。暗い感じで、淋しそう。
6 BM 図：けんかをして、むすっとしている夫婦。
7 BM 図：暗い部屋で、悪いことの秘密の相談をしている父・息子(?)
10 図：子どもの結婚に反対する両親。
13 B 図：だれも来ない真っ暗な家。
19 図：人喰い女の住む家。
20 図：クリスマスを迎えたいが、相手がいない。
- 事例 B：2 図：男は畑仕事、女は本を読む、おばさんはながめている。
5 図：遅く帰ってくる息子と、息子を叱る父。息子の食べ物を作る母。
6 BM 図：女主人(奥様)とその息子、それと召使い(又は運転手)。
母と息子の死後は、幽霊屋敷になる家。
7 BM 図：死んだ母と、その母の墓を作る異父兄弟。
19 図：雪に埋まった家だが、窓から明かりが見え、煙突もある。
中では、家族 4 人がクリスマスをしている。

事例 A の語る家は「人喰い女の住む家」であり、「暗い部屋」や「真っ暗な家」であり、クリスマスを迎えたいが、相手がいない。事例 B の語る家は、「窓には明かり」がとまり、食事や暖かさのシンボルである「煙突」もあり、家族でクリスマスをしている。ただし、家の外は大雪で、春はまだ来ないようである。

(8) 性愛的な主題・異性関係

- 事例 A：3 BM 図：けんかをして、相手を叩いてしまう。
6 BM 図：けんかをして、むすっとしている夫婦。
13 MF 図：女を殺害する男は、逃走するが逮捕される。
- 事例 B：4 図：「結婚してくれ」と告白する男とそれを受け入れる女。
ふたりは結婚して、いつまでも幸せに暮らす。

10 図：男は技術を身につけ、お金をためて帰り、女とふつうに暮らす。

13 MF 図：男性は女性とドライブし、食事をして、一夜を過ごす。男は女に電話番号とメッセージを残して出ていくが、やがてその女と結婚し、幸せに暮らす。

事例 A では、異性関係の空想が貧弱で、異性への敵意もうかがえる。事例 B では、異性関係の空想が反復されており、性的な異性との結びつきを空想していることが分かる。

(9) 罪悪感

事例 A：3 BM 図：けんかをして、謝りたいが、どうしていいか分からず、泣く。

6 BM 図：けんかをして、謝りたいけど、自分は悪くないという気もある。

13 MF 図：殺人犯は、自殺もできず、逃亡するが、警察に捕まる。

事例 B：5 図：家に遅く帰って来たので、父に叱られる。けれど、お母さんが食べ物を作ってくれる。

7 BM：宝石どろぼうを捕まえる探偵と警察官の話が、死んだ母親の墓を造る兄弟の話にすり変わる。

8 BM 図：悪いやつらはどっかへ行ってしまう。

事例 A は、内心に罪悪感を抱いているようだが、それをどう表現してよいか分からないようだ。過罰的・自罰的で、自我と統合されていない、やや未発達な超自我ではないかと推察される。性犯罪の意味がじゅうぶんに分からず、性犯罪をけんかや殺人と同列に考えているようでもある。事例 B は、自己中心的で、罪悪感に乏しいようだ。自分の犯罪に直面できず、空想レベルで否認してしまおうとしているのであろうか。超自我の発達という観点からいえば、事例 B は、かなり幼児的であるようだ。

[付 記]

本稿は、各所の少年鑑別所で勤務する心理技官の方々から提供していただいた資料にもとづくものである。資料を提供していただいた方々のお名前は掲げないが、記して感謝の意を表します。

引用文献

- 法務総合研究所 1994 平成6年版犯罪白書 大蔵省印刷局
法務総合研究所 1995 平成7年版犯罪白書 大蔵省印刷局
法務総合研究所 1996 平成8年版犯罪白書 大蔵省印刷局
堀内 守 1991 法的立場から見た性の問題行動 黒川義和編「実践・問題行動教育体系10巻・性の問題行動」所収 pp.27 - 37 開隆堂

追手門学院大学人間学部紀要 4号

- 大川 力 1975 性犯罪 安香 宏・麦島文夫編「犯罪心理学」所収 pp.283-294 有斐閣
清水 信・山岡一信 1974 異常心理と犯罪心理 東京法令出版
鈴木睦夫 1986 TAT 解釈に関する一提言と公表された一解釈例の批判的検討 中京大学文学部紀要 21
巻 2号 pp.173-198
氏原 寛 1980 TAT の解釈例 氏原 寛著「心理臨床の実際」所収 pp.215-238 誠信書房

1997年3月31日 受理